# 幕末風塵録

綱淵謙錠

文春文庫

文春文庫

幕末風塵録

定価はカバーに表示してあります

1989年4月10日　第1刷
1989年11月25日　第2刷

著者　綱淵謙錠
発行者　豊田健次
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3－23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-715710-1

文春文庫

# 幕末風塵録

綱淵謙錠

文藝春秋

# 幕末風塵録　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

第1話　黒船ショック……11
第2話　榎本武揚と樺太……17
第3話　吉田松陰とテレパシー……23
第4話　海を渡ったサムライたち……29
第5話　水垢離をとる勝小吉……35
第6話　大奥は砂糖天国……41
第7話　舟を漕ぐ遊女……47
第8話　護持院ヶ原の仇討……53
第9話　家茂びいき……59
第10話　将軍の気くばり……65
第11話　〈天誅〉のゆくえ……71

第12話　生麦の鮮血……77
第13話　写真術事始……83
第14話　ナポレオンと留学生……89
第15話　オランダ離れ……95
第16話　仏人〈白山伯〉……101
第17話　攘夷派と国際派……107
第18話　パリのおまわりさん……113
第19話　慶喜裏切る……119
第20話　真犯人を追う……125
第21話　文藝春秋界隈……131
第22話　時は流れる……137

第23話　戊辰の江戸……143
第24話　トコトンヤレ節由来……149
第25話　黒い爪痕……156
第26話　馬を駆る女……162
第27話　目撃者は語る……168
第28話　〈妖怪〉の実像……174
第29話　勇者の末裔……180
第30話　下北の会津藩士……186
第31話　死出の旅……192
第32話　刀痕記……198
第33話　門外不出の裏ばなし……204

第34話　慶喜揺れる……210
第35話　海舟疑われる……216
第36話　死の正夢……222
第37話　二十年後の再会……228
第38話　獄中の地雷火……234
第39話　慶喜へのこだわり……240
第40話　百年の怨念を超えて……246
あとがき……252

# 初出掲載誌

『諸君！』（原題は「幕末風塵録」）

攘夷派と国際派　昭和60年1月号
舟を漕ぐ遊女　昭和60年2月号
文藝春秋界隈　昭和60年3月号
吉田松陰とテレパシー　昭和60年4月号
馬を駆る女　昭和60年5月号
時は流れる　昭和60年6月号
目撃者は語る　昭和60年7月号
護持院ヶ原の仇討ち　昭和60年8月号
門外不出の裏ばなし　昭和60年9月号
慶喜揺れる　昭和60年10月号
海舟疑われる　昭和60年11月号
慶喜へのこだわり　昭和60年12月号

『普門』（原題は「幕末に生きる」）

榎本武揚と榊太　第4号（昭和54年4月15日）
下北の会津藩士・広沢安任　第5号（昭和54年7月15日）
水垢離をとる勝小吉　第6号（昭和54年10月15日）
家茂びいき　第7号（昭和55年1月15日）
海を渡ったサムライたち　第8号（昭和55年4月15日）
勇者の末裔　第9号（昭和55年7月15日）
黒い爪痕　第10号（昭和55年10月15日）
刀痕記　第11号（昭和56年1月15日）
戊辰の江戸　第12号（昭和56年4月15日）
黒船ショック　第13号（昭和56年7月15日）
写真術事始　第14号（昭和56年10月15日）
大奥は砂糖天国　第15号（昭和57年1月15日）
死出の旅　第16号（昭和57年4月15日）
真犯人を追う　第17号（昭和57年7月15日）
〈天誅〉のゆくえ　第18号（昭和57年10月15日）
パリのおまわりさん　第19号（昭和58年1月15日）
死の正夢　第20号（昭和58年4月15日）
将軍の気くばり　第21号（昭和58年7月15日）
〈妖怪〉の実像　第22号（昭和58年10月15日）
トコトンヤレ節由来　第23号（昭和59年1月15日）
ナポレオンと留学生　第24号（昭和59年4月15日）
生麦の鮮血　第25号（昭和59年7月15日）
オランダ離れ　第26号（昭和59年10月15日）
仏人〈白山伯〉　第27号（昭和60年1月15日）
二十年後の再会　第28号（昭和60年4月15日）
獄中の地雷火　第29号（昭和60年7月20日）
慶喜裏切る　第30号（昭和60年10月15日）
百年の怨念を超えて　第31号（昭和61年2月15日）

《歴史随想集》

# 幕末風塵録

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

# 第1話　黒船ショック

まず当時の落首から、――

阿部川も黄名粉をやめて味噌をつけ
　たつた四杯で胸につかへた
古へ（いにし）の蒙古の時と阿部こべに
　ちつとも吹かぬ伊勢の神風
阿部川も遠藤豆も味がない
　上喜撰には合はぬお茶菓子

〈阿部川〉や〈伊勢の神風〉は老中首座阿部伊勢守正弘（備後福山藩主）を、〈遠藤豆〉は若年寄遠藤但馬守胤統（たねのり）（近江三上藩主）を暗示し、〈四杯〉と〈上喜撰（上質茶の銘柄）〉はペリー艦隊の四隻の蒸汽船を意味する。つまり、これらは嘉永六年（一八五三）六月三日、黒船が浦賀に来航したときの幕閣のあわてぶりを諷刺した狂歌である。

幕閣だけではない。旗本御家人連中においても、関ヶ原や大坂の陣に御先祖さまの使用した御家伝来の武具甲冑は、天下泰平の二百五十年間に頻発した火事で焼失したり、永年の〈手許不如意〉のために質屋の質草に化けたりで、毎年正月の具足開きに鏡餅とともに床の間に飾る鎧櫃の中は、いつのまにか埃と蜘蛛の巣のほかには何も見当らなかった。

そこへ黒船騒ぎである。

具足より利息にこまるはだか武士
臑当よりもお手当を待つ

と、顔を蒼ざめさせてあちこちから借金したり、公儀からお手当をもらってなんとか具足をそろえるありさま。これにたいしてにわかに活気づいたのは具足師・馬具屋・刀研ぎ・質屋といった連中である。思わぬ儲けがころがりこんだので、

よく来たなアメリカ様とそつと云ひ

と、不謹慎な北叟笑みもついこぼれるというものである。

さて、その黒船と接触した海の様子はどうかというと、『横浜開港側面史』（明42、横浜貿易新報社）に、この嘉永六年に十五歳だった平野政七という人の「嘉永六年の富津」という回顧談が載っている。

富津というのは、いうまでもなく現在の千葉県富津市である。ちょうど対岸の三浦半島観音崎と、江戸湾の入口を扼する位置にある。当時、富津は会津藩が沿岸警備の任にあたっていた。その富津へペリー艦隊が入って来たのである。

〈会津様は大きなボートの様な船に弾丸除の土俵を積んで、其の間に大砲四門を並べて港の入口を固めて居ました中を、米艦二艘が各一艘づゝの帆前船を引て這入て来ました〉

というわけである。

陸には台場が十数カ所もあり、大砲には弾丸がこめてあって、いざというときには打ち出すばかりになっていた。そして海上には三百艘ほどの伝馬船を漕ぎ出して、黒船に備えた。

その伝馬船の船頭たちには、三度の飯が炊出しとして幕府から出され、朝、法螺貝が鳴ると各自が飯の容れ物と、汁や沢庵の容れ物を持って兵粮場へ行く。そして飯や味噌汁をもらって船へ帰って食べるのである。しかも昼と晩の食事のときは、一人につき竹柄杓に一杯ずつの酒もくれた。また八ツ刻（午後二時）になると、兵粮場の大釜で煎じた琵琶葉湯が一同にふるまわれた（『広辞苑』によれば〈琵琶葉湯〉というのは、ビワの葉に肉桂や甘茶などを細く切ってまぜ合わせたものの煎汁、とあり、暑気払いや痢病を防ぐ効能がある、という）。

政七少年はその船頭の一人だったわけだが、〈御手当は誠によかつたが、第一怖いのと飯の悪味のには閉口した〉と述懐している。

肉体そのものは楽だったが、いまに戦いがはじまれば〈異人に捕虜にされて生血を絞られて染物に使はれると云ふ事でしたから心配でした〉といっている。

やがて久里浜に応接所ができ、フィルモア大統領からの国書を浦賀奉行戸田伊豆守氏栄に手交したのち、ペリー艦隊は観音崎を通過して江戸湾内に侵入、金沢沖に仮泊し、さらに江戸まで七海里の地点まで接近した。

国書授受とともに交渉は一段落したと安心していた幕府側は大あわてにあわて、急遽内海警備の諸藩に出兵を命じ、夜に入ってからは老中・若年寄・三奉行以下火事装束に身を固めて登城し、営中鼎の沸くがごとく、浦賀・江戸間は飛脚の往来が入り乱れた。まして江戸市民の騒ぎは大変なものであった。

いっぽう、狼狽した浦賀奉行所では、伝馬船五艘に命じてアメリカ艦隊の跡を追わせた。その一艘に政七少年が乗っていた。

ところが、大急ぎで出て来たので、こちらには食べ物の準備が何もない。全員腹を減らして困っていると、米艦から水兵どもが手招きして、食べ物をくれた。茹でたまごであった。そこでたまごを割ってみると、みな生茹でである。半熟ということを知らない船頭たちは、これを全部海に捨ててしまった。するとたまご焼きをくれた。これも中に牛や豚が入っているので食べられない。パンをもらえば、それには臭い鬢付油のようなものがついていて鼻持ちならない。そのうちに牛の焼肉もくれたが、これも受け取るとすぐに海に捨てた。

全員、眼がとび出るほど腹が減っているが、だれ一人、それらのご馳走を食べようという者がいない。そのとき、米艦から茄子のしなびたのや、大根・人参のしっぽを海に捨てるのが見えた。船頭たちは「あれだ！」と叫んで船を寄せ、海面にプカプカ浮んでいるそれらを拾って、塩をつけて食べた。それで当座の飢えをしのぐことができた。

翌朝、また軍艦で手招きするので、伝馬船を近づけてみると「軍艦に上がれ」という。そこで恐る恐る上がってみると、食堂らしいところに連れて行かれて、「これはどうだ、それはどうだ」と、いろいろな食べ物を見せられたが、船頭たちはみな首を振るばかり。最後に政七少年が「これ」と指をさしたのが、あとで考えるとビスケットだった。すると水兵たちはそれを新聞紙にたくさん包んで、持たせてくれた。

そのうちに水兵の一人が、ギヤマンの茶碗（ガラスのコップ）に赤黒い水を持って来たので、船頭たち全員は真ッ蒼になった。これは人間の生血に相違ない、と思ったのである。西洋人は人間の生血で染物をするとは聞いていたが、それを飲みもするのかと、早々にそこを逃げ出して、

伝馬船にもどった。すると、その朝もまた生茹でのたまごをくれた。船頭たちはもはや空腹に耐え切れず、それを割って、中の〈半流動して居る処を捨て、周囲の熟した処〉だけを食べた。〈私共は何でも異人は此様な物を呉れて日本人を殺す積りだらうと思つて居ました、夫れが今に成つて見ると人間の生血だと思つたのは葡萄酒で、悪い香だと思つて、胸を悪るくしたのはバタで、今では甘く之を飲み食ひするといふのは、時勢が変れば人も変るもので御座います〉

というのが、晩年（この回顧談のときは七十一歳）の政七少年の感想である。

## 2

六月十二日午前、四隻のアメリカ艦隊は来年の再航を約して江戸湾を出て行った。

アメリカが早く帰つてよかつたね

また来るまではすこしおあひだ

その〈すこしおあひだ〉のあいだに、幕府はアメリカの国書を翻訳して、広く全国の大名に頒ち、幕府の役人、諸藩士ないし一般庶民でもよろしいから、何かよい考えがあったら忌憚なく意見を建言せよ、と布告した。きわめて民主的なお触れであった。そこで諸大名や幕臣たちから続々と意見書が上呈され、大名だけでも約二百五十通、幕臣らの答申約四百五十通、計七百近い建白書が集まったといわれる。

自身番の前に掲示されたお触れをみて、江戸の町民も大沸きに沸いた。八代吉宗の時代に評定所の前に目安箱を置いて、庶民の要求や不満などを投書させたことはあるが、公方さまが御政治向きのことをわれわれにまで相談なさるなんていままで聞いたことがないというので、評判になった。「このたびの建白がご採用になり、戦さに勝ったとなれば、大名にお取立てになるそうな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton